

生きる力を身につける——社会科のどこが変わるか

【復申】教科の基盤を問い直す機会に

馬居 政幸

一 「本来」から「現行」社会科へ
「生きる力」を「主体的な問題解決学習能力」と「自律的共感的なコミュニケーション能力」ととらえ、それは「社会科が五十年來その育成をめざして追求してきた」ものであり、「社会科においてはそれほど唐突ではない」とする小林先生の社会科観を、共感的に読ませていただいた。ただし、本稿

の課題である社会科の今後に対しては、「生きる力」が「社会科のあり方に大きな変更をせまることではない」とする小林先生の予測のように樂觀的になれない、というのが私の立場である。

もともと、小林先生も「その実現度は別としても」とか、「本来総合的な

性格をもっているはずの」という表現により、実際に実践される社会科授業が必ずしも「本来」の姿を「実現」しているわけではないことを示唆している。したがって、小林先生の予測はむしろ「本来の社会科」でなければ「大きな変更をせまられる」との意味を言外に込めた表現と理解したい。

そこで私は小林先生とは逆に、五十年も経てもなお「本来の」とか「その実現度は別として」といった断り書きが必要な社会科ではなく、「現に行われている」大多数の社会科が要請される変化について考えたい。

そのヒントは、答申の「総合的な学習」に関する次の表現である。

上の相違をそのままにする限り、現行社会科と「総合的な学習」は質的に異なる教育といわざるをえない。

一方、小林先生によれば、「生きる力」は問題解決学習能力であり、総合的な学習の課題は「本来の最も「社会科らしい」学び」である。とすれば、先の教科構造を改編しない限り、大多数の現行社会科は「生きる力」や「総合的な学習」に対応できない。

たとえば問題解決学習の場合、いかに学習方法に用いようとも、統一カリキュラムに基づく現行社会科の枠内にある限り、子供一人一人に即した問題解決過程ではなく、模範解答への道筋を辿る授業にならざるをえない。しかし、イデオロギーへの信頼が崩壊し、現実の多元性と可変性があらわになった社会では確率的な答えしか存在しない。そして「生きる力」が要求される社会は、現在以上に多元かつ可変的な二一世紀の日本と世界である。

したがって、子供たちが一人の人間として生きるために必要な問題解決能力の育成を目的とするなら、社会科は「総合的な学習」と類似した教科構造にならざるをえない。その意味で教科構造改編の覚悟なくして社会科の未来はないと考える。そしてそれは社会科の変化を求めらるもう一つ課題、すなわち学習内容の厳選に結びつく。

三 教育課程の再構築を

社会科は答申に示された七種の「厳選の視点」で直接例示された視点が二つ（「知識の伝達や暗記」と「各学段階や各学年で重複する内容」）。教科間での重複が厳選対象になる「総合的な学習」との関連でも、やはり小林先生が指摘するように、内容の重なりが多ければ多いほど、厳選の刃は社会科に向けられることになる。

さらにより重要なのは、現行社会科の教育課程の社会的基盤が崩壊したと。すなわち、冷戦構造下での国内平

二 教科構造改編への覚悟は

「子供たちの発達段階や学校段階、学校や地域の実態等に応じて、各学校の判断により、その創意工夫を生かして展開される必要がある……子供たちが積極的に学習活動に取り組むといった長所の面を取り上げて評価することは大切であるとしても……試験の成績によつて数値的に評価するような考え方を採らない……学校や地域の実態によつては、年間にわたつて継続的に行うことが適当な場合もあるし、ある時期に集中的に行つた方が効果的な場合も考えられる……」（傍線筆者）

傍線部が示すように、「総合的な学習」は相対評価と統一カリキュラムを廃止し、授業時間数と実践時期も含めて各学校の創意工夫に基づき実施することを求めている。他方、社会科は全出版教科書を画一的な時間割の下で共通時間数実践され、評定結果が指導要録に記入される教科である。この構造

和と若年労働力の増大を条件に、性別役割分業に基づく近代家族の一般化を伴って、後進農業社会を工業化するためのキヤッチアップが社会科の基盤であった。だが「生きる力」が発揮される二一世紀の日本は四人に一人が高齢者、男女が共に働き家事育児を担い、異なる文化との共生が日常化されるファーストランナー型社会である。

そのため「生きる力」が社会科に求めるもう一つの変化は、今と未来を生きる子どもたちにとつてのリアリティ感覚を機軸に、工業化のためのキヤッチアップ型カリキュラムを高度情報化社会におけるファーストランナー型カリキュラムに改編することである。

最後にもし教師が改編と再構築の困難をさげ、旧來の教科構造と教育課程の中に閉じこもる道を選択すれば、社会科という教科の存続自体が問われる可能性が高いことを指摘しておきたい。

〈静岡大学教育学部教授〉

生きる力を身につける—社会科のどこが変わるか

往復書簡

総合としての社会科の再生を

小林 宏己

一 「生きる力」と社会科
第十五期中教審の「第一次答申」で最も強調されたのが、「ゆとり」のなかでの「生きる力」の育成ということである。

ここでいう「生きる力」とは、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動し、よりよく問題を解決する能力」であり、さらに「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」のことであるという。

前者は、要するに主体的な問題解決能力のことである。これはまさに社会科が五十年來その育成をめざして追究

してきたことである。その実現度は別としても、今度の社会科においても大切なねらいとして位置づくことに誰も異論はないであろう。

後者はどうであろう。私はこれを自律的共感的なコミュニケーション能力としてとらえてみたいと考える。このことも「話し合い」を主要な学習活動として用いてきた社会科においては、それほど唐突さはないであろう。

したがって、「生きる力」の育成自体が、これまでの社会科のあり方に大きな変更をせまることはないはずである。もちろん、社会科における子どもの学びの現実には、より主体性が保障され、豊かなコミュニケーションが展開

されるよう、いつそうの授業改善に努めるべきではあるが。

二 「社会科らしさ」は大丈夫か

しかし、問題は別にある。それは、「総合的な学習」との関係のあり方にかかっている。

「生きる力」の育成に「ゆとり」が不可欠であることに異論はない。そのため、学校週五日制、教育内容の厳選、そして「総合的な学習の時間」なのである。では、この「総合的な学習の時間」が実施された場合、社会科との関係はどうなるのであろうか。

「総合的な学習の時間」では、国際理解、情報、環境、ボランティア、自然体験などについての学習活動が考えられるという。

しかし、これらのテーマは、本来総合的な性格をもっているはずの社会科の学習内容として、追究可能なものばかりではないか。

変化する社会にあつて、人間のくら

しの不易と流行の問題に対して、ひとりひとりが探究的な過程で、事実に基づき体験を通して主体的に判断しながら、多様な価値にふれあい、自らの意思と行動を選択決定していこうとするのが、本来のもつとも「社会科らし

い」学びではないだろうか。教科としての社会科にこうした学びが期待できないとすれば、それは現行の学習内容の編成や学習指導の方法に問題があるからであろう。

先にあげられた総合的な学習のテーマは、どれもが現在そして将来における人間のくらしのあり方に関わるきわめて課題性の高い問題ばかりである。したがって、もしもそうした内容を「総合的な学習の時間」で扱うものとされたとき、残存する社会科からは、もっとも「社会科らしい」学びの部分

三 社会科の今後—三つのシナリオ
① 「社会科」が「総合的な学習の

時間」の中に統合され、廃止となる。この場合、「総合的な学習」の内実に「社会科らしさ」が受け継がれることが望まれる。

② 「社会科」に「総合的な学習」のテーマを追究するために役立つ「情報供給先」としての役割が付与され、結果的には「地理・歴史」の専門（学習）性を強めたかたちに再編される。

③ この場合、子どもたちにとつては（指導する教師にとつても）既存の教科に加えて「総合的な学習」のテーマが新たな「教科」として意識されやすくなり、結果的には学習（指導）負担の増大に帰結するかもしれない。

④ 「社会科」が本来もっている総合性をよりいっそう発揮して、「総合的な学習の時間」を柔軟に活用し、他教科・諸領域の活動との関連性を高めながら、子どもにとつての新たな学びの場を創造していく。

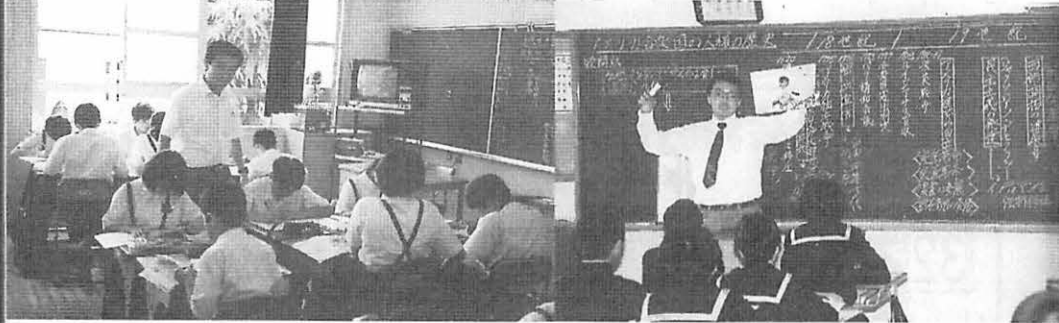
この場合においても、既存の社会科

は一度徹底してその内容を厳選し、教科としての性格・意味づけを問い直して「再生」を図る必要がある。

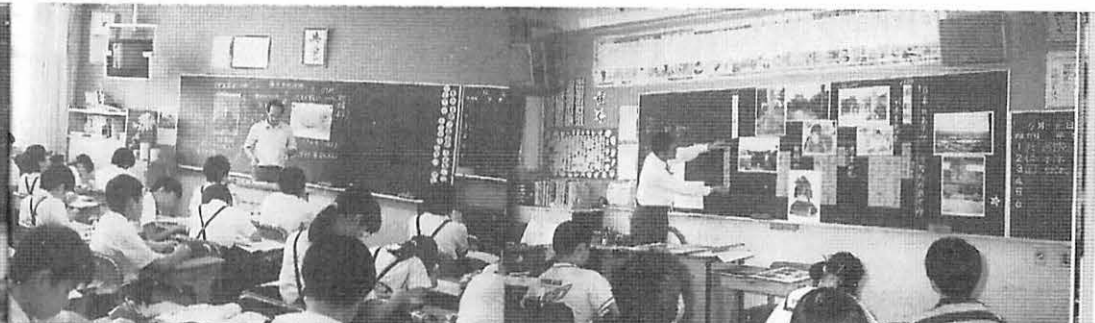
私は、先に「本誌」九十五年十一月号で、共感的な人間関係を築きあうようなコミュニケーション能力の育成と子どもの学びの文脈に即した単元構成—学習指導要領の「大綱化」—について述べたことがある。

また、「総合的な学習の時間」を真のゆとりある学びの場として活用しながら、総合的な学習が展開しやすくなるよう学校のあり方そのものを改革していくために、学校カリキュラム全体をも捉え直していく必要があると考えている。

〔拙稿〕個のよさが生きる学校カリキュラムの創造「個のよさが生きる学校」東洋館出版、一九九六年／「子どもと共につくる学級・学校とは」『ひと』九五年四月号、太郎次郎社（東京都世田谷区深沢）東京学芸大学附属世田谷小学校



城戸 茂氏の授業 「武士の進出」



小西裕久氏の授業 「アメリカ合衆国の人権の歴史」

東 和博氏の授業 「鎌倉幕府」

高橋勸次氏の授業 「頼朝と河野氏」

特集 総合学習的発想—授業にどう入れるか

〈500字アンケート〉教科の枠を超えた総合的教育活動—どんな授業をイメージするか…
 生命の神秘に目を見張る感性を育てる活動を—川崎英一／黒板を子供に明け渡す—
 寺尾慎一／プロジェクト的な学習—池野範男／私・私たち・彼らの物語りの統合—
 壽卓三／教科の垣根のない生きる力を培う学習活動—相部芳徳／根源的な「学び」
 の体験を—岩下 修

*往復書簡 「中教審答申の骨子」を社会科の課題として考える

生きる力を身につける—社会科のどこが変わるか
 自ら学び考える—社会科のどこが変わるか
 個性尊重の価値観—社会科のどこが変わるか
 ゆとりある教育活動—社会科のどこが変わるか
 厳選と基礎基本の徹底—社会科のどこが変わるか
 地域との結びつき—社会科のどこが変わるか
 学力評価の観点—社会科のどこが変わるか
 国際化—社会科のどこが変わるか
 わが国の伝統文化理解—社会科のどこが変わるか
 日本人としての自己確立—社会科のどこが変わるか
 情報ネットワーク—社会科のどこが変わるか
 体験活動の活性化—社会科のどこが変わるか
 環境教育—社会科のどこが変わるか

〈往 復 中〉
 小林 宏己／馬居 政幸
 松藤 司／二杉 孝司
 中西 俊治／梅野 正信
 金児 利明／工藤 文三
 園田 強／白井 嘉一
 深見 秀一／安山 信男
 別府 陽子／大津 和子
 浅野 弘光／山口 康助
 山田 隆弘／木村 博一
 大川原 幸生／江口 勇治
 新保 元康／奥住 忠久
 佐島 幸次

わが国における総合学習の歴史
 諸外国における総合学習の歴史
 —アメリカ・イギリスおよびオーストラリアを事例として—
 藤井 千春
 加藤 幸次

*徹底討論 総合学習は社会科の自殺を促すか
 〔提案〕総合学習の推進は教科教育・社会科の自殺の勧めである
 〔提案を読んで〕
 総合学習は古くて新しい課題
 総合学習は社会科を充実させる
 共存の方向を考えたい
 「学び方そのものを学ぶ」総合学習の可能性

岩田 一彦
 中野 重人
 有田 正
 片上 宗二
 吉永 潤

◆「総合学習の時間」をどうデザインするか…私の夢と現実
 まずは、散歩から始めよう
 暗い環境教育からの脱皮
 町づくりに参加・提案させるをこう構想する
 —社会科と総合学習の強化・発展を—
 プラスαのある環境学習をこうデザインする
 —今何が可能なのかを求める取り組みをめざして—
 子どもありきの総合学習への挑戦
 個性豊かな(総合的)学習

能仁 宏樹
 石原 卓
 伊藤 裕康
 宮本 哲也
 大近 正博
 今井 修
 寺西 和子
 寺西 和子

連載講座
 ◎歴史の用語を洗い直す
 皇民化
 ◎世界史の窓から社会科を考える
 歴史授業のワールド化
 ティーバートができる子どもを育てる
 尋問型ティバートの指導
 実践に学ぶ「社会科改革の方向」
 社会科におけるコンピュータ活用
 中学校社会科の新テストの作問技術—テスト問題を評価・添削する
 地誌的な学習成果を問う問題を比較する
 わが教室の「社会科研究最前線」
 わが県の情報—この授業あり

江間 史明
 星村 平和
 佐長 健司
 石田 俊二
 北 俊夫
 遊澤 文隆
 木全 清博
 窪田 博繼

◎研究会案内 藤枝市高洲南小学校
 横浜国立大学教育学部附属横浜小学校・浜松市北小学校
 東京都港区青山小学校
 北海道当麻町北星小学校